

「卷之四」
水郷玉島
後編



大正橋から北方・八丁洲樋門を望む

目次

〔一〕 水門点景(続)

里見川・道口川下流域図 …………… 112

〔二〕 里見川水系

〔一〕 昭和水門 …………… 113

〔二〕 裏川水門と新樋水門跡 …………… 114

〔三〕 唐樋樋門と八丁洲樋門 …………… 116

〔四〕 亀山樋と三本松樋門 …………… 118

資料 古見川悪水吐論争 (120) …………… 120

〔五〕 八島排水機場 …………… 120

〔三〕 水郷の風景

〔一〕 橋のある風景 …………… 122

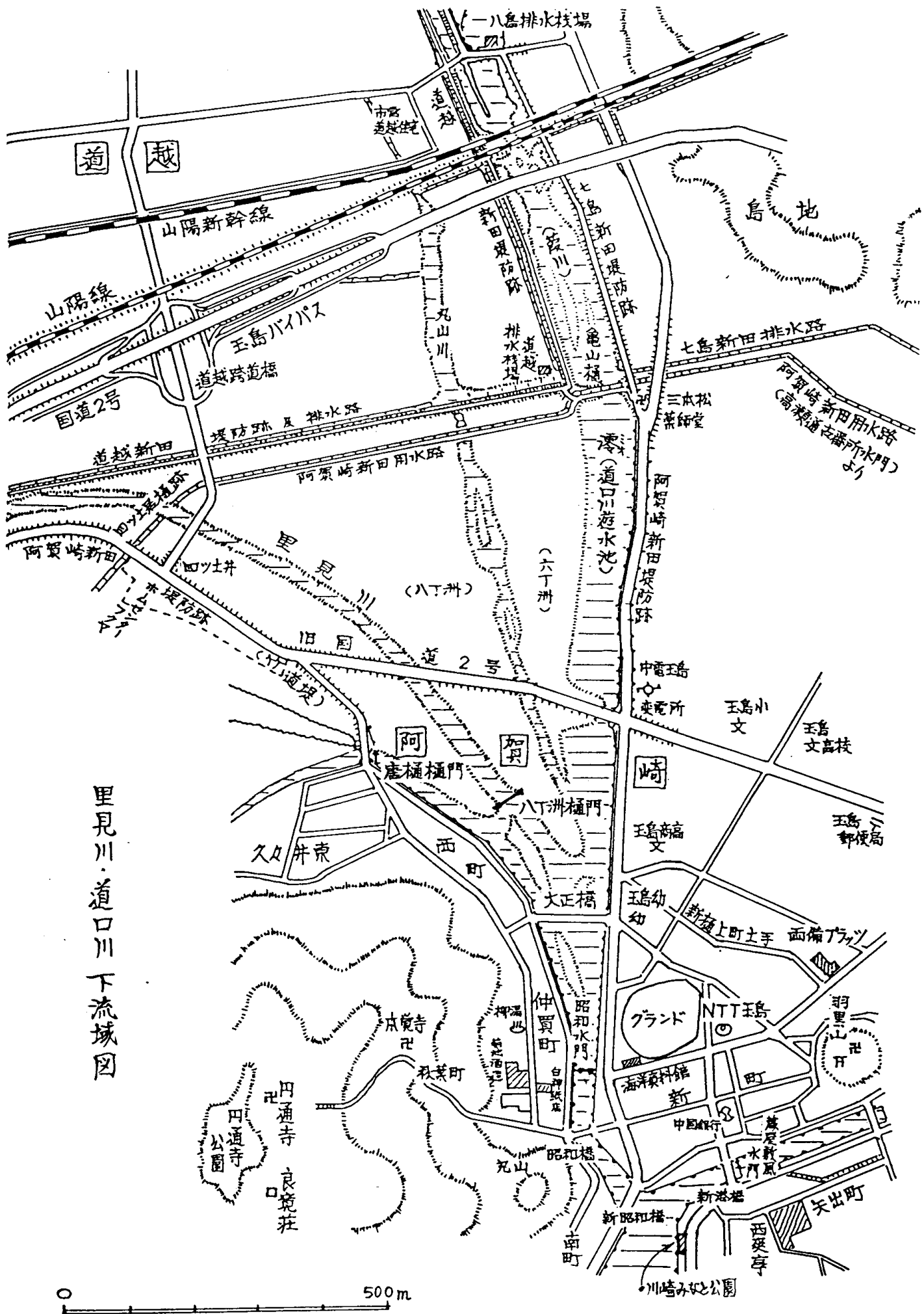
大正橋 昭和橋 中橋 柳橋

〔二〕 川崎みなと公園 …………… 125

常夜燈 玉島燈台記念建造物

(補) 新樋の石灯笼 (130) 港の風景

補稿 古番所水門外・明治中期の玉島湊 (134)



里見川・道口川下流域図

〔2〕 里見川水系 「前ページ地図参照」



写真上は昭和橋より北方に望む昭和水門

〔了〕

昭和
水門

〔前編97ページ分布図参照〕

昭和五十年三月 移転建造

昭和11年に旧水門(97ページ上図ア・イ・ウ)を統廃合して現在の昭和橋の位置に水門と橋を建設した〔昭和水門・昭和橋の名の起源〕。老朽化に伴って橋は現在位置に、水門は北方50m付近に移して昭和50年改築。里見川の河口に位置し、里見川・道口川に流れこむ排水を一括海へ放流。

写真下は水谷侯遺徳顕彰碑付近から見た昭和水門



裏川水門 「前編97ページ分布図④」

現在は大正橋東詰め南側にあり、昭和五九年一月に改築（写真上）。古くは新樋水門（97ページ上図コ・下図ウ）と称され、写真下の家の前を奥に坂を登り切ったところにあった。昭和三〇年頃裏川一帯の低湿地を埋立て土地造成の時、水路を西に延し玉島幼稚園南沿いに堤防の底をくぐらせて里見川へ放出させた。



写真の右の石垣は江戸時代からの新樋上町土手のなごりである。

写真上は新樋水門跡……道路の下にコ
ンクリート柵に囲まれた水路と化した。



水路をはさんで右側が新樋上町土手で菜の抜みの間から古い石垣が見える。左側の新しい住宅はかつての干拓地の湿田が宅地造成されたところ。水路は奥に延びて現在は両備ストアの敷地になった悪水溜りの広い池に続く。さらに小泉ビルの裏を抜けて篠山製パン所のところまで本所悪水川と出合う「箭編の（上・下）」。両備ストア駐車場にあって材木屋があった時、原木を港から裏川を通し新樋水門を経て運び込んでいたという。



六 唐樋樋門と八丁洲樋門



写真上・唐樋樋門を下手から見る。ブリッジが2段構成の大きな樋門である。「昭和33年築造・岡山県」のプレートがあるが新旧混在のようすからみて、昭和50年代に改装されたのではないかとと思われる。高い方のブリッジがある樋門が新しいもので、低い方のブリッジがかかるコンクリートの支柱が昭和33年築造の樋門の樋柱であったと考えられる。唐船・魚崎方面からの排水を集中調整していると思われるが、樋門の名称由来はわからない。

写真下は唐樋樋門を上手から見る。水路の中や右の側壁に役目を終えた古い樋柱がみえる。





写真上は八丁洲樋門
 (P11の写真も参照)

写真上の樋門は排水調整のためではなく、用水供給のための井堰と思われ、この井堰周辺の広大な沖洲上の水田への給水に活躍しているのであろう。西側側の川土手には樋門操作のための配電盤が設けられている。

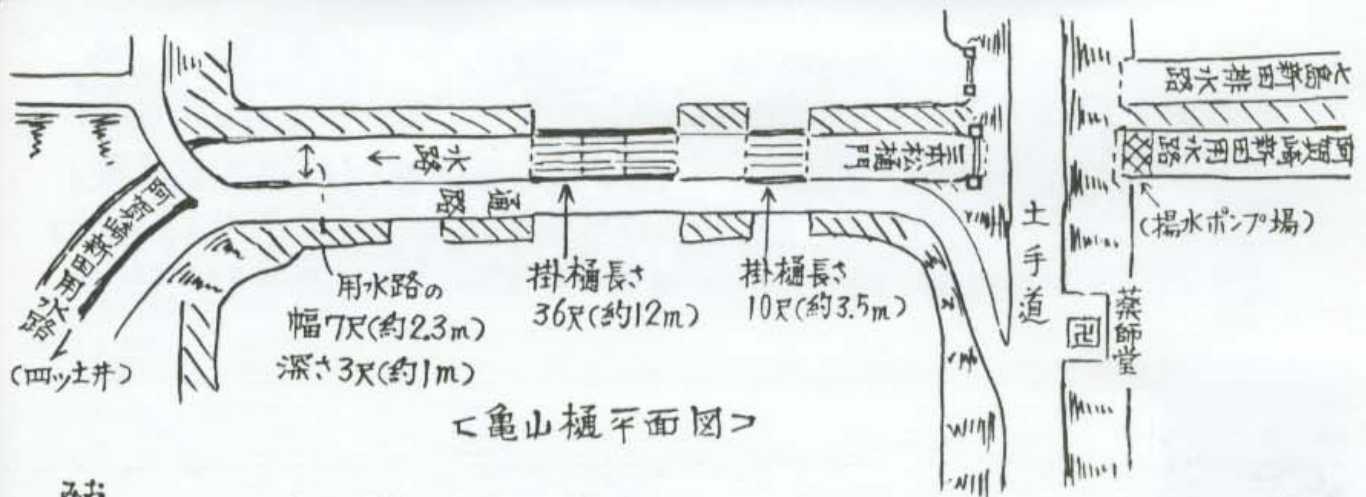
里見川と道口川の合流点の広い河口にできた大きな三角洲、六丁洲・八丁洲の名のおこり
 は多分洲の長さ6町(約600m)、8町(約800m)に由来するようと思われる(P112地図参照)
 写真下も小さいながら井堰であらう。水中の樋柱の溝に閘板をはめこんで流れるせき止める。

写真下の井堰は西側側にある。
 どのように利用されているのか詳しくは不明。





(工) 亀山樋と三本松樋門
 (112ページ地図参照)

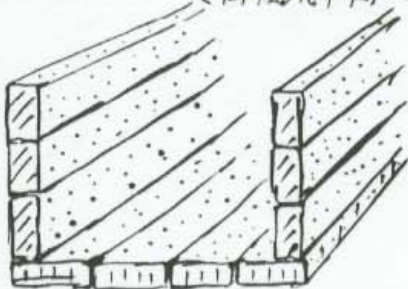


亀山樋平面図

みよ
 = 濤の上を石の掛樋を渡して用水を通した =

- 10尺以上もの長石を並べて樋を作る。
- 石の接ぎ目から水漏れしないように貝殻を砕いたものに麻くずと石灰や粘土を混ぜたもので目止めをした。

(掛樋見取図略)



夏には水陰が、雨や嵐の日には
 茶師堂の中が道行く人たちの
 憩いの場であった。



昔日の三本松と茶師堂



永い歲月の間には修復が繰り返えされたであらうが、江戸時代初めに阿賀崎新田へ高瀬通しの水を送る目的で作られた樋が、三百年以上もたった今に、なほ当時の姿をどめ、工夫や技術のすばらしさをうかがわせている。

写真左は三本松樋門（昭和五九年改築）を龜山樋の仲ほどから見る。右側はコンクリート舗装された道。左側が水路……やはり現在ではコンクリートで塗り固められている。



る。写真右は土手道の東側。右側の水路は七島新田排水路。左側上部に阿賀崎新田用水路の揚水ポンプ施設の一

部が見える。写真の中央、草花の茂る土手は備前岡山領と備中松山領の境界線に当るところ。

江戸中期以降には天領阿賀崎新田村と私領（岡山領）七島新田村・道越新田村などとの間で、里見川・道口川の排水問題にからむ論争が絶えなかった。

資料 占見川（里見川）懸水吐論争の一例

元文二（一七三七）年占見川掘覆し並びに四ツ土居樋尻の件で阿賀崎新田村と七島・道越・八重占見新田の四カ村が争い、江戸訴訟の末、それぞれに證文を取らわして決着した。

- ① 四ツ土居尻の川幅は従来通り二一間余とする
- ② 占見川は川幅九間とし、上流より掘覆す
- ③ 四ツ土居尻普請の入用は岡山領の村と阿賀崎新田村とが半分あて出す
- ④ 樋尻土砂揚場は竹道堤に添って二百間余とし、一反につき九百匁あて岡山領の村より地主に渡す
- ⑤ 懸水樋従来の一カ所（八重・道越・道口三カ村分）に加えて新樋を合わせて二カ所とする

オ 八島排水機場
(112ページ地図上部参照)



農業基盤整備事業		事業の概要	
県営湛水防除事業			
地区名	八島地区	位置	倉敷市玉島八島地内
事業主体	岡山県	流域面積	614 ha
		受益面積	152 ha
		排水機	横軸タ流ポンプ φ1200×75KW×2台 Q=180M ³ /分×2台
		機場	鉄筋コンクリート造 181.64M ²
		工期	昭和49年度 - 昭和53年度
(本事業は土地改良法に基づく 農林省の補助事業である)		管理者 倉敷市	

八島排水機場施設概要

[同様な目的の道越排水機場(112ページ地図上部)があるが略す。]



写真上は八島排水機場全景を西南方向から見たもので、ポンプアツプによ

七島新田地帯は昔から用水の確保はもとより、排水にも大きな悩みがあった。海拔1m前後の干拓地の前面に、出口をふさぐように広大な阿賀崎新田が広がる。現在も山陽線の北方に「透みお」と称する悪水溜が川のようになって東西に横たわっている。透とは元来、海だった時の水脈を活かして悪水溜兼配水池としたと考えられる。



って透^{みお}に溜った水を排水機場南の樋門(写真下)から放出して三本松の方へ流下させる。

③

水郷の風景



写真上は昭和水門から北方へ大正橋を望む。 写真下は大正橋西詰めの南側から眺見。 橋の名の由来は大正4年架橋にもとづく。 延長116m 幅3.5mの木桁木造橋であったが当時は重要な県道橋であった。羽黒山西から新植上町土手を通り大正橋を渡って西町を抜け、竹道堤を四ツ土井から道越・金栄下竹へと出た。(112ページ地図参照) 昭和48年長さ136mのコンクリート橋に改築されて現在に至る。

④
橋のある風景



写真左は昭和11年から南方へ昭和水門を望む。

満潮の大潮で水面が上昇し橋桁がっかりそうだ。



昭和11年に架橋されて昭和橋と称された。当時は水門と併設であった。老朽化に伴って昭和50年に改築の時、水門は北方へ移築され、橋は従来からの所に架け替えられ、分離された。(113ページ 昭和水門の項参照)

中橋は江戸時代から木造橋として存在していたが(前編100ページ上段の絵図参照)昭和の初め頃(10年代か)石造橋に改築された。 かつて、港町では橋と水門の併設が普通で、橋だけ単独は珍しかったのではないが。

写真右は中橋…港橋から南へ旧団平町へ通じる
道踏が矢出川に架る橋、右側の朽ちた建物は
かつて玉島電信局分局の建物だったというが？…



写真は通町商店街の西入口のたまたま
 ずまい——柳橋の面影は消えた——



下の絵は昭和初めごろの通町商店街西入口の写したものの。当時としてはハイカラな街灯やアーチが入りを飾り、昭和四年にコンクリート製の橋に架けかえられた柳橋が往還に華を添えていた。

今では荒涼とした姿となり、柳橋も北側の欄干は取りこわされて水路の上は車庫と化し、南側の欄干も一部を残して写真のように通路と化して自動車が入りこむなど、昔日の柳橋の姿はない。

江戸時代、橋の両側に柳が植えられていたことから、柳橋の名が



「昭和十年ごろの観光絵ハガキを模写（色あせて不鮮明な部分が多い）」

つけられたといわれる。

(2) 川崎みなと公園

(ア) 常夜燈二基

|| 案内板銘文 ||

「室は東に 赤間は西に 玉島港はまん
中に」と歌にもうたわれた玉島港、
江戸時代には備中きつての商港として栄え、
全盛期には四十三軒の問屋が軒を連ねてい
たという。
そのにぎわいぶりには、参勤交代の西国大
名で栄えた兵庫県の室津港や、山口県の赤
間関(現下関)に勝るとも劣らなかつたとい
われている。

出入りする多くの船の安全祈願のため設
けられていた常夜燈も時代の変遷によりそ
の機能を果さなくなり、港を見下ろす場所
(良寛荘)に移設されていたものを、当公園
整備を機に旧位置の近くに復元した。

この公園は市民の憩いの場としていただ
くためのものです。

おたがいに緑を大切に育てましよう。

昭和五十九年三月 岡山県倉敷市地方振興

局 水島港都市開発事務所(電話四〇七四一)

常夜燈の概要(128ページ写真参照)

設置場所	設置年月	設置者	名称
矢出町の水門附近	文化十四年(西暦一八一七年)	柚木武塔	金毘羅大権現常夜燈
移設新港町橋附近	明和五年(西暦一七六八年)	講中(世話人)山平治	金毘羅大権現永代常夜燈

(イ) 玉島燈台記念建造物

|| 案内板銘文 ||

玉島燈台の歴史

このモニユメントは、玉島柏島の八幡山に設
置されていた「玉島燈台」の上層部をそのまま
移設保存したものです。八幡山には、江戸時
代に船用の灯明台がつくられ、明治十六年に最

初の灯台として「八幡灯台」が設置され、そのあとを引き継いで昭和二十六年に「玉島灯台」が建設されました。

以来四十二年間にわたって、玉島港へ出入りする船はもとより、水島灘を航行する船の安全の道しるべとして重要な役割を果たしてきました。

しかし、対岸の玉島E地区の理立てが進み、灯台の役割が十分果たせなくなったため、平成五年二月、約二・八キロメートル沖合に「水島港玉島防波堤灯台」が新たに建設され、「玉島灯台」はそのつとめを終えました。

私たちは、海上交通の安全のため、灯台の果たす役割やそれを支える海上保安庁の任務の大切さを再認識するとともに、通称「八幡灯台」として、市民の皆さんに長い間親しまれてきた「玉島灯台」を港町玉島のシンボルとして永遠にここに保存するものです。

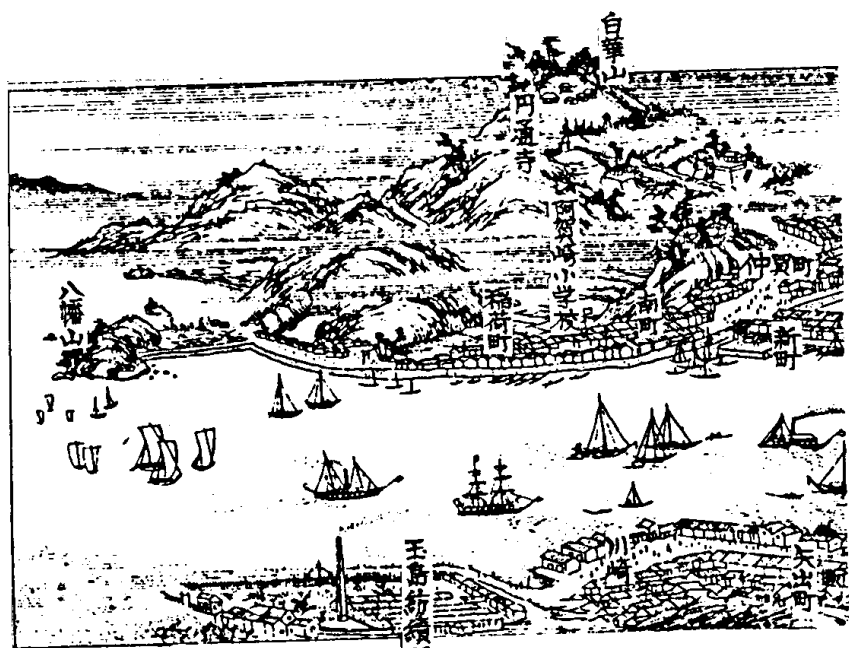
玉島灯台の概要

設置年月 昭和二十六年六月

灯 質 閃白光 毎五秒一閃光

光 源	百ボルト 五百ワット
光 度	二十五万カンテラ
光達距離	十六海里（約三十キロメートル）
地上からの高さ	十一・八メートル
平均海面からの高さ	三十一メートル
廃止年月	平成五年二月

岡山県 倉敷市



明治20年ごろの玉島港 絵図（部分）
 [名称は着者の補筆]
 (全図は134ページ参照)

写真上は川崎みなと公園全景
 (112ページ地図の右下参照)



玉島港湾の東西の海岸道路の新設や改良工事が昭和30年代に展開。新設の西海岸道路が約10年の歳月をかけて昭和40年に開通。あわせて新昭和橋が昭和39年に完成。一方、中島町・川崎間の海岸道路は昭和37年に整備開通し、東海岸道路の整備も次第に進み、新町・川崎間に新港橋が架設されたのが昭和49年。港周辺の整備が進み景観が一変された中で、川崎の海岸沿いに公園が作られ景観に点晴をもたせられた。

写真下は川崎みなと公園設立由来と
 常夜燈の由来案内板 (125ページに説明
 文を掲載…参照)





石灯笼(右の写真) 字の刻文

正面・金毘羅大権現 側面(右) 無し

背面・文化十四丁 五年五月

側面(左) 柚木武啓(玉島村庄屋、西栗亭主)

— 写真下の石灯笼をくらべて字が短かく

笈が大きく重厚、宝珠の下の蓮華の彫りが

精密で鮮明、全体的にどっしりした感

じを与える—



石灯笼(左の写真) 字の刻文

正面 金毘羅常夜燈 側面(右) 明和

五^戊子年六月吉日 世話人小平治 石

工興七郎 背面 金毘羅 永代夜燈

側面(左) 講(講)中

… 昭和初期には東浜の荷揚場にあったという

水郷玉島前編 100ページ図③参照……



玉島灯台記念建造物（写真上）と「玉島灯台の歴史」案内説明板（写真下）

松林が続く八幡山の先端に玉島灯台はあった。八幡山に設置されていたことから八幡灯台の呼称で親しまれてきた。

次ページの図のスマートな灯台の上層部もそのまま移設保存したのが上の写真中央に見える白い建造物（モニュメント）であり、実物である。灯台のミニ模型が柏島神社の参道入口前・立花容器南の県道の手前にある。

「玉島灯台の歴史」説明文は125ページ下段〜126ページを参照

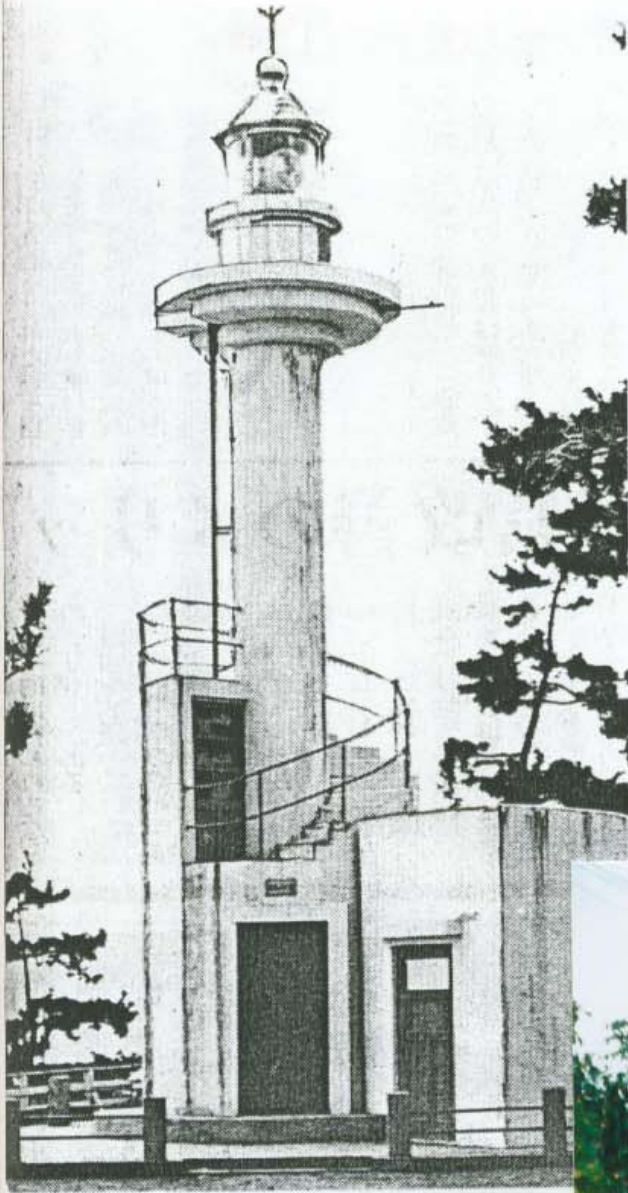


「補」新樋の石灯笼

かつては新樋水門のかたわらで常夜灯として、水門を通る船や新樋上町土手る往来した人たちの夜の目印となっていたと思われる。

自然石をうまく利用して造られ(写真下)、竿の正面中央に金毘羅大権現、その両側に吉備津宮・羽黒宮と刻まれ、背面に文政八配(二八三五)八月吉日とある。

昭和三〇年ごろの玉島灯台の優姿



信仰の対象でもあったのだろうか：
 石灯笼に正対した方角はるかに讃岐金毘羅宮が
 遙拝できるとか、新樋上町の西はずれで出入口を守る
 塞神さいじんであるのか、いろいろと推測できる……
 富田地区には自然石の石灯笼が多く、
 集落の出入口とか往来の分岐点などに
 よく見られる。石灯笼の地域性を考
 えてみるのも面白い。

▲ 港の風景 ▼

川崎みなと公園の海岸べりより北方新町西部を望む



写真上は大潮の満潮で海水面が常よりも高く足もとの岸壁を洗う。さざ波がキラキラと光を反射しゆったりとした時の流れを楽しませる。

写真下の左の木立ちの茂みが川崎みなと公園、その手前の岸壁が写真上の右下にわずかに見える岸壁に当る。写真の右側は西海岸道路に沿って南町・稲荷町の家並みが続き、はるか遠くに玉島大橋(源平大橋)が見える。春の閑日、干潮期の港風景。

新港橋より南方玉島港湾を眺望



補稿(四点)

七島東端の古番所水門



写真上…奥の水門は高瀬通に設けられて、この水門を閉じると高瀬通の水は手前の水門から阿賀崎新田用水路を西へと流れて水を供給しながら三本松へ、亀山樋を渡って更に西へ延びて四ツ土井(土居)を経て分流する。

写真下…昭和水門が開けられて水かさが増えるとどこからか水鳥の群が集まってくる。水面を泳ぎながら餌をとったり、干潟で日なたぼこしながら羽をたくらう姿が見られる。



三本松付近の遊水池に遊ぶ水鳥
(118ページ 亀山樋・三本松樋門参照)



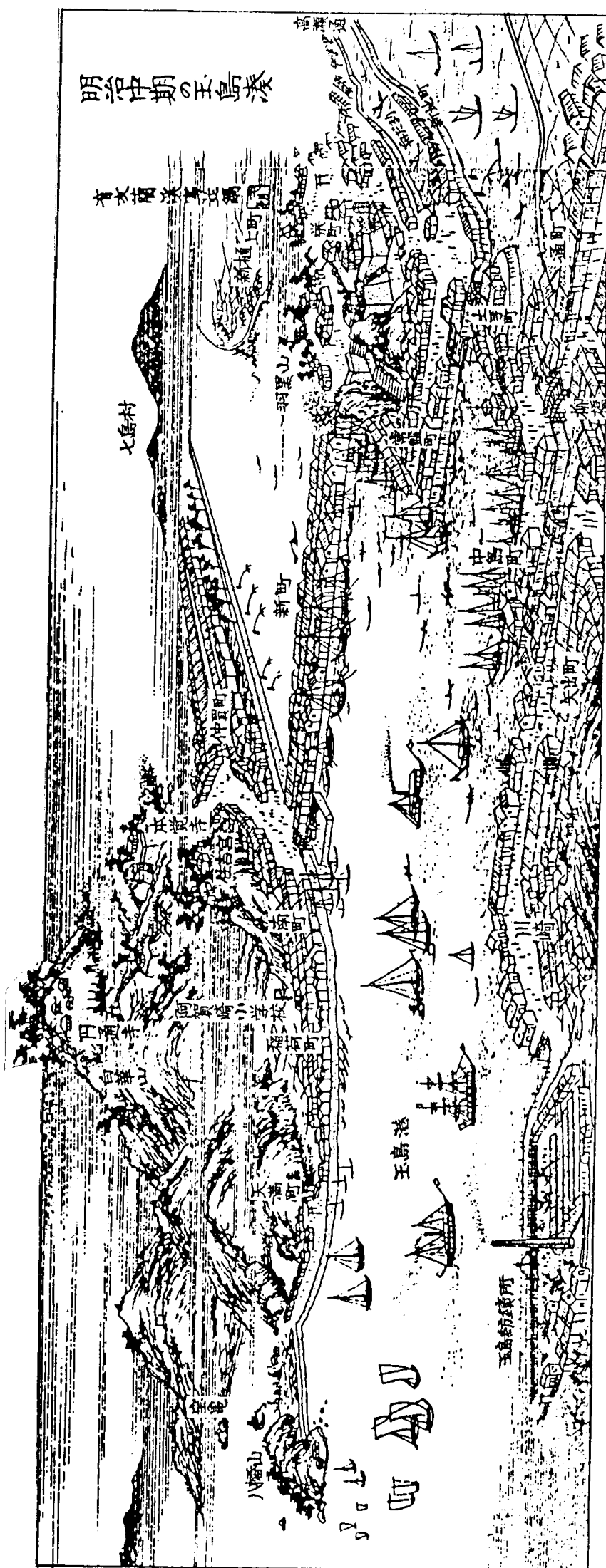
P.113上の写真(昭和水管)で右側の柱(道路に面して)中ほどに取り付けられている。

60年の風雨に耐えた古色蒼然とした姿の中に、手入れもされず放置された水管の赤茶けた色は物悲しく、栄枯盛衰の浮世の様を感じる。

写真手前のコンクリートの大きな桁組みは、かつてこの上に家が建ち水路を覆っていた土台の名残りである。人の身勝手さと物のあわれを感じさせる風物である。



明治中期の玉島湊



玉島紡績所

明治14年乙島野浦前沖(俗称シカゴの浜)に岡山県下最初の紡績工場として設立された。
 国立二十銀行玉島支店長 難波二郎(政) 府の輸入したミユール2000錠の紡績機械を私下げでもらい設立

日露戦争後の不況で破産し、明治41年倉敷紡績kkkに売却。

南町・阿賀崎川学校

明治5年学制発布により創設された公立小学校では、高さ約6mの旗竿に、縦1.2m横1.5mの旗を上下3段に分け、上・下を紅色地、中央白地として学校名を入れ、標旗として毎日掲げた。

明治6年清龍寺に羽黒山啓蒙所が設立

これ、その後、明治9年、上本町に玉島小学校、南町に阿賀崎川学校が分離して設立され、校名も改称した。

当時は学校の建設費と維持費、教師の給料などすべて、の必要経費は町村民の負担であった。児童100人程度の規模で、学校経営年間200円を要したといひ、当時の産民の一人当年均年収は約21円だったといひ